


 書評

三村 將 編

前田貴記, 内田裕之, 藤澤大介, 中川敦夫 編集協力

精神科レジデントマニュアル

西村勝治

この本は「マニュアル」というタイトルからイメージされるようなハウツー本ではない。

まず、どのように患者に向き合うのか。精神科医としての基本姿勢を説いた第1章「精神科診療における7つの心得」で、このマニュアルの著者たちが求める精神科医のあるべき姿が浮かび上がってくる。そして、第2章以降は、精神科臨床ではどのようなシチュエーションが生じ得るのか、それに精神科医はどう応ずればよいのか、簡潔に、肝を押さえて記述されている。

評者は常々、精神症候学が軽んじられている近年の傾向を憂いているが、第6章「主要症候、主訴」では、症候を正確に把握し、対応するためのエッセンスが余すことなく盛り込まれており、精神症候学を大切にしている著者たちの姿勢が感じられて、うれしい。

第7章「疾患」では、疾患の特徴や診断のポイントだけでなく、薬物療法や心理社会的療法における原則、さらには患者・家族への説明の仕方まで取り上げられている。患者に向き合う精神科医の姿勢はどのようなべきかが、ここでもあらためて立ち上がってくる。知識・技能・姿勢(態度)という、精神科医として獲得すべきコンピテンシーが自然に意識される、よく練られた内容である。第8章以降ではコンサルテーション・リエゾン精神医学や多職種連携にも触れ、近年ますます発展し、拡大する精神科医の役割が十分意識されている。

また、「Further Reading」として各章で参考文献が挙げられ、興味に応じて知識を深めることができるようになっているのも、読者の成長を願っての

ことだろう。

本書は慶應義塾大学精神・神経科学教室のスタッフ陣の手によるものだ。この教室の層の厚さは万人の知るところである。脳科学から心理社会的領域まで幅広い分野の第一線で活躍する先輩精神科医たちの経験がふんだんに盛り込まれている。

“いい精神科医とはどのような存在なのか? いや、そのまえに、医師とは?” 編者は、本マニュアルの序において、『果報者ササル——ある田舎医者物語』(みすず書房, 2016)という1冊の本を紹介している。そこに綴られたイングランドの小村で開業する医師ジョン・ササルの生活と思索は、本マニュアルの根底に流れるポリシーを象徴している。つまり、常に体とこころを診る。患者の生活、患者の人生にも思いをはせる。このポリシーが通奏低音となって本マニュアルの随所に顔を出し、大変きめ細やかな診療ガイダンスとなっている。

白衣のポケットに入る、軽く手触りの良いこの1冊には、精神科医の第一歩を踏み出していくためのエッセンスがぎっしりと詰まっている。この本が日々開かれ、読み込まれ、使い込まれる頃には、一つ成長した精神科医の姿がそこにあるだろう。初期研修医や後期研修医をはじめとする若手医師だけでなく、精神科領域にかかわるメディカルスタッフにもぜひお薦めしたい1冊である。

(東京女子医科大学教授・精神医学)

●B6 変型 352 頁 2017 年 3 月 定価: 本体 3,800 円+税 医学書院刊